

専攻別比較からみた看護学生の情動知能特性

橋本 由里・平井 由佳

概 要

本研究では、看護学生の情動知能の特性を明らかにするため、文系学生、理系学生と比較した。その結果、看護学生が文系学生、理系学生よりも「対人対応」、「共感性」、「愛他心」の得点が高かった。「自己洞察」、「状況洞察」では文系学生の方が理系学生よりも有意に得点が高かった。「対人コントロール」では、看護学生は理系学生よりも有意に得点が高かった。これらの結果から、EQS得点の差は性差の影響というよりむしろ、専攻による影響と考えられる。また、性差が認められた因子は「対人コントロール」であり、男性の方が女性よりも有意に得点が高かった。

キーワード：情動知能, EQS, 看護学生

I. はじめに

近年、看護職を目指す学生が患者との人間関係を築く際に、患者の気持ちを理解できないために、つまづきを生じはじめていることが指摘されている(井村ら, 2012)。また、小玉ら(2014)は現代の若者の情動スキルの低下が問題視されていることを踏まえ、医療の現場に出ていく学生に対して、早期から情動スキル向上のプログラムやシステムを準備する必要性を論じている。対人関係を築く上で、情動のコントロールは不可欠である。特に、看護職を目指す者には他者に対する思いやり、共感などが求められるため、患者の感情状態を正確に把握し適切に対処することは重要である。患者との対人関係を築く際に、情動のコントロールが適切になされないと、患者へのケアなどに影響を及ぼすものと考えられる。

情動のコントロールに深く関わっているの

が、情動知能である。Salovey & Mayer (1990)によれば、情動知能とは、自己と他者の感情を正確に評価し表現する技能、自己と他者の感情を効果的に調整する技能、生活において動機づけ、計画立案、達成のために感情を利用する技能とされる。また、ゴールマンは、情動知能をこころの知能指数 (Emotional Intelligence Quotient, EQ) とし、知能指数 (Intelligence Quotient, IQ) と対比させて論じるとともに、前者を「感じる知性」、後者を「考える知性」とし、両者のバランスが重要だと述べている (Goleman, 1995)。

このように情動知能はわれわれが生活を送る上で必要不可欠である。とりわけ看護職は対人援助職ともいわれるため、情動知能を高める必要があると考えられる。情動知能を測定するのに例えばEQS (Emotional Intelligence Scale) という尺度が使われている。看護学生あるいは看護職を対象とした情動知能に関する研究は多くはないが、先行研究によると、EQSにおいて、看護学専攻の学生(以下、看護学生と記す)は、看護学以外の専攻の学生よりも「対人対応」得点や「共感性」得点が高いことが示されている(宇津木, 2006; 橋本・宇津木, 2010など)。そ

本論文は日本感情心理学会第22回大会で発表した橋本・平井(2014)をもとに分析を加え、加筆・修正を行ったものである。

これらの研究では、医療系の学生（例えば検査技師のコースの学生や医学科の学生）が看護学生との比較対象とされている。一方で、医療系以外の学生を看護学生の比較対象とした研究は少ない。また、「対人対応」得点や「共感性」得点は女性の方が男性よりも高いといわれている（内山ら，2001）。看護学生は女性の比率が高いため、看護学生の「対人対応」得点や「共感性」得点が他群に比べて高いのは、性差が影響している可能性も考えられる。そこで、本研究においては、医療系以外の学生を比較対象とし、性差の影響も考慮し、看護学生の情動知能の特性を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

本研究では、看護学生を対象とした平井・橋本(2013)の調査結果を使用し、情動知能特性について、以下の調査対象者と比較を行った。

1. 時期 平成25年7月 EQS調査用紙記入、回収

2. 調査対象者：本研究の参加に同意を得られたA大学文科系学部の学生（以下、文系学生と記す）、理科系の高等A専門学校生（以下、理系学生と記す）。

3. 実施方法

対象者に、情動知能を測定するEQSを実施した。EQSは65の質問項目から成り、「自己対応」、「対人対応」、「状況対応」の3つの領域で構成されている（内山ら，2001）。これらの領域は、それぞれ、自己対応：「自己洞察」、「自己動機づけ」、「自己コントロール」、対人対応：「共感性」、「愛他心」、「対人コントロール」、状況対応：「状況洞察」、「リーダーシップ」、「状況コントロール」の対応因子から構成されている。さらに対応因子はそれぞれ、自己洞察：「感情察知」、「自己効力」、自己動機づけ：「粘り」、「熱意」、自己コントロール：「自己決定」、「自制心」、「目標追求」、共感性：「喜びの共感」、「悲しみの共感」、愛他心：「配慮」、「自発的援助」、対人コントロール：「人材活用能力」、「人づきあい」、「協力」、状

況洞察：「決断」、「楽天主義」、「気配り」、リーダーシップ：「集団指導」、「危機管理」、状況コントロール：「機転性」、「適応性」の下位因子から構成されている。これらは5段階尺度で回答させるものであり、得点が高いほど、感情を上手く生かす能力が高い。情動知能特性については、EQSマニュアル（内山ら，2001）に基づき実施した。質問は65項目あり、「0. まったくあてはまらない」「1. 少しあてはまる」「2. あてはまる」「3. よくあてはまる」「4. 非常によくあてはまる」の5段階で回答させた。

4. 倫理的配慮

調査用紙は授業開始時に配布し、授業後回収を行った。調査対象者には、研究の目的を伝え、研究参加は自由意思であり参加の可否は成績に影響しないこと、結果は研究目的以外には使用しないこと等を説明した。なお本研究の実施にあたっては、島根県立大学出雲キャンパスの研究倫理審査委員会の承認を受けた上で実施した。

Ⅲ. 分析方法

データについては、調査対象者個人が特定されないように配慮し、コード化をした上で分析を行った。

統計処理にはSPSS Statistics 21.0 for Windowsを用い、領域得点、対応因子得点を従属変数とし分散分析を行った。さらに、検定後、有意差のあった項目について多重比較を行った。危険率 $p<.05$ 、 $p<.01$ を統計学的有意水準とした。

Ⅳ. 結 果

調査用紙を246名に配布し、244名から回収した（回収率99.2%）。そのうち記入漏れがある者30名を除いた214名（文系学生116名：男性70名女性46名、平均年齢20.1歳、理系学生98名：男性87名女性11名、平均年齢19.0歳）を本研究の分析対象とした（有効回答率87.7%）。

以下の分析にあたっては、先述の文系学生116名と理系学生98名に、看護学生129名：男性12名女性117名（平均年齢19.5歳）を分析対

象に加え、専攻別（文系学生、理系学生、看護学生）によるEQS得点の比較を行った。

1. 専攻別によるEQS得点の比較（文系学生、理系学生、看護学生の比較）

EQSについて領域得点、対応因子得点を算出した。専攻別からみたEQSの3つの領域得点、9つの対応因子得点の平均値についてそれぞれ図1、図2に、また、専攻別・性別からみた領域得点を図3、対応因子得点を図4に示す。

1) 領域得点

領域ごとに、2（性別）×3（専攻）の2要因

の分散分析を行った。

「自己対応」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = 2.281, p > .05$)。専攻の主効果が認められた ($F(2,337) = 3.219, p < .05$)。多重比較をしたところ、有意差は認められなかった ($p > .05$)。性別×専攻の交互作用は認められなかった ($F(2,337) = 1.370, p > .05$)。

「対人対応」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = .887, p > .05$)。専攻の主効果は認められた ($F(2,337) = 6.352, p < .01$)。多重比較の結果、看護学生と理系学生との間に有意差が認められた ($p < .05$)。つまり、看護学生の方が理系学生よりも有意に得点が高

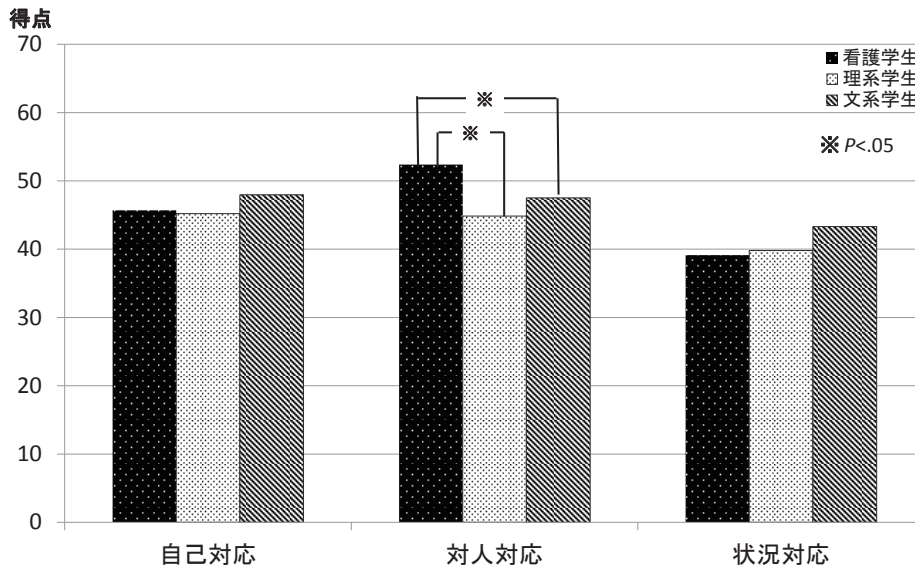


図1 専攻別領域得点の比較

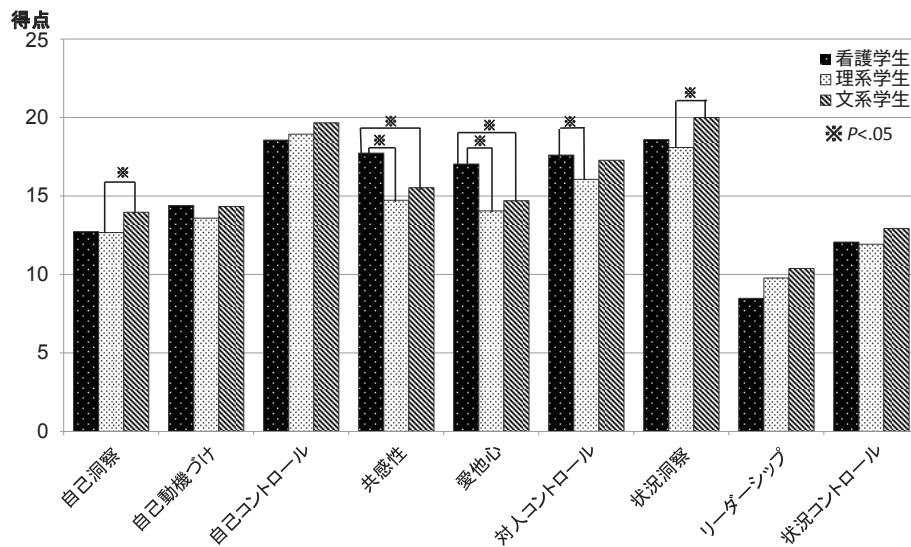


図2 専攻別対応因子得点の比較

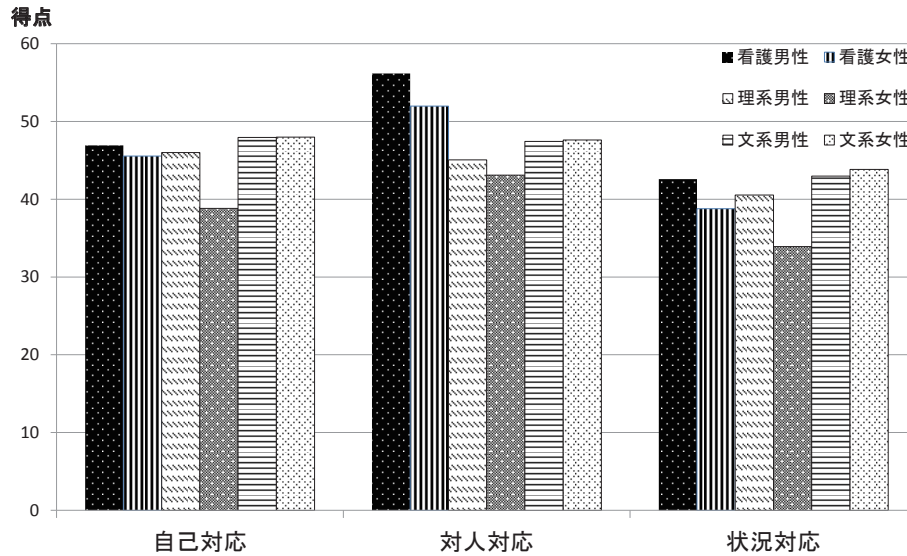


図3 専攻別・性別からみた領域得点

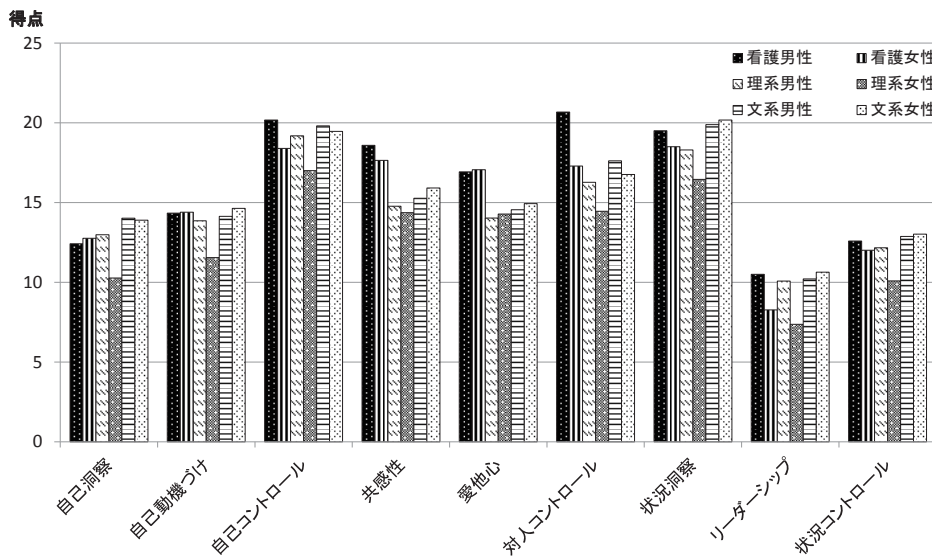


図4 専攻別・性別からみた対応因子得点

かった。看護学生と文系学生との間にも有意差が認められた ($p < .05$)。つまり、看護学生の方が文系学生よりも有意に得点が高かった。性別×専攻の交互作用は認められなかった ($F(2,337) = .445, p > .05$)。

「状況対応」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = 2.027, p > .05$)。また専攻の主効果も認められなかった ($F(2,337) = 2.906, p > .05$)。性別×専攻の交互作用も認められなかった ($F(2,337) = 1.187, p > .05$)。

以上の結果から、「対人対応」得点について専攻別による差が認められ、看護学生の方が理系学生、文系学生よりも有意に得点が高いことが

示された。一方、すべての領域において、性別の主効果や性別×専攻の交互作用が有意ではなく、性差は認められなかった。

2) 対応因子

対応因子ごとに、2 (性別) × 3 (専攻) の2要因の分散分析を行った。

「自己洞察」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = 1.916, p > .05$)。専攻の主効果が認められた ($F(2,337) = 6.297, p < .01$)。多重比較を行ったところ、理系学生と文系学生との間に有意差が認められた ($p < .05$)。つまり、文系学生の方が理系学生よりも有意に

得点が高かった。性別×専攻の交互作用は認められなかった ($F(2,337) = 2.113, p > .05$)。

「自己動機づけ」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = .665, p > .05$)。専攻の主効果も認められなかった ($F(2,337) = 2.208, p > .05$)。性別×専攻の交互作用も認められなかった ($F(2,337) = 1.451, p > .05$)。

「自己コントロール」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = 2.690, p > .05$)。専攻の主効果も認められなかった ($F(2,337) = 1.143, p > .05$)。性別×専攻の交互作用も認められなかった ($F(2,337) = .537, p > .05$)。

「共感性」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = .100, p > .05$)。専攻の主効果が認められた ($F(2,337) = 6.726, p < .01$)。多重比較の結果、看護学生と理系学生との間に有意差が認められた ($p < .05$)。つまり、看護学生の方が理系学生よりも有意に得点が高かった。また、看護学生と文系学生との間に有意差が認められた ($p < .05$)。つまり、看護学生の方が文系学生よりも有意に得点が高かった。性別×専攻の交互作用は認められなかった ($F(2,337) = .516, p > .05$)。

「愛他心」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = .136, p > .05$)。専攻の主効果が認められた ($F(2,337) = 5.310, p < .01$)。多重比較の結果、看護学生と理系学生との間に有意差が認められた ($p < .05$)。つまり、看護学生の方が理系学生よりも有意に得点が高かった。また、看護学生と文系学生との間に有意差が認められた ($p < .05$)。つまり、看護学生の方が文系学生よりも有意に得点が高かった。性別×専攻の交互作用は認められなかった ($F(2,337) = .014, p > .05$)。

「対人コントロール」得点について、性別の主効果が認められた ($F(1,337) = 4.119, p < .05$)。多重比較の結果、男性の方が女性よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。専攻の主効果も認められた ($F(2,337) = 3.511, p < .05$)。多重比較の結果、看護学生は理系学生よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。性別×専攻の交互作用は認められなかった ($F(2,337) = .653, p > .05$)。

「状況洞察」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = .817, p > .05$)。

専攻の主効果が認められた ($F(2,337) = 2.977, p < .05$)。多重比較の結果、理系学生と文系学生との間に有意差が認められた ($p < .05$)。文系学生の方が理系学生よりも有意に得点が高かった。性別×専攻の交互作用は認められなかった ($F(2,337) = .538, p > .05$)。

「リーダーシップ」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = 3.501, p > .05$)。専攻の主効果も認められなかった ($F(2,337) = 1.877, p > .05$)。性別×専攻の交互作用も認められなかった ($F(2,337) = 1.949, p > .05$)。

「状況コントロール」得点について、性別の主効果は認められなかった ($F(1,337) = 1.395, p > .05$)。専攻の主効果も認められなかった ($F(2,337) = 2.500, p > .05$)。性別×専攻の交互作用も認められなかった ($F(2,337) = .924, p > .05$)。

以上をまとめると、専攻別に有意差が認められた因子は「自己洞察」、「共感性」、「愛他心」、「対人コントロール」、「状況洞察」であった。「自己洞察」、「状況洞察」では文系学生の方が理系学生よりも有意に得点が高かった。「共感性」、「愛他心」については、看護学生は文系学生、理系学生よりも有意に得点が高かった。「対人コントロール」については、看護学生は理系学生よりも有意に得点が高かった。

また、性差が認められた因子は「対人コントロール」のみであり、男性の方が女性よりも有意に得点が高かった。その他の因子では性別の主効果、性別×専攻の交互作用が有意ではなく、性差が認められなかった。

以上より、領域得点では、看護学生は「対人対応」得点が文系学生、理系学生よりも高いことが示された。この結果は、看護学以外の専攻の学生よりも「対人対応」得点が高いという宇津木 (2006)、橋本・宇津木 (2010) の結果と一致する。

また、「対人対応」、「共感性」得点については女性の方が男性よりも高い (内山ら, 2001) という知見とは異なり、本研究では性差が認められなかった。

V. 考 察

本研究では、看護学生は、文系学生や理系学

生よりも「対人対応」得点、「共感性」得点が高いという結果が得られた。また、女性の方が男性よりも「対人対応」得点や「共感性」得点が高いという先行研究の結果から、性差の影響を考慮し分析を行った。しかしながら本研究では、先行研究の結果とは異なり性差は認められなかった。図3、図4から、有意差はなかったものの男子看護学生の「対人対応」得点、「共感性」得点は他群と比較して最も高いことが示されている。したがって、看護学生においては女性の比率が高いため、看護学生の「対人対応」得点や「共感性」得点が高くなるのは性差が影響しているとは考えにくい。以上の観点から、本研究において看護学生が文系学生、理系学生よりも「対人対応」得点、「共感性」得点が高いのは性差の影響というよりむしろ、専攻による影響と考えられる。ただし、先行研究とは看護学生の比較対象の専攻分野が異なるため、今後更なる検討が必要であろう。

「対人対応」得点が高いことは、他者との人間関係を良好に保ち、適切に維持していく能力が高く、「共感性」得点が高いことは、他者の感情状態を察知し、感情に応じた適切な感情反応を起こす能力が高いといえる(内山ら, 2001)。看護職には、相手の立場に立って物事を考え、相手の価値観を尊重する関わりが求められる。また、「愛他心」でも看護学生は文系学生、理系学生よりも有意に得点が高いことが示された。「愛他心」とは他者を思いやる気持ちであり(内山ら, 2001)、「共感性」と同様に看護職を目指す者にとっては重要な資質である。しかしながら、「共感性」や「愛他心」が高すぎることは相手の気持ちや立場を優先するため、自分の気持ちや思いを抑制してしまうことにつながりかねない。その結果、心が疲弊し、心の健康を損なうと考えられる。

一方「自己洞察」、「状況洞察」では文系学生の方が理系学生よりも有意に得点が高かった。また、有意ではなかったものの、文系学生に比べると看護学生はいずれも得点が低い傾向にあった。「自己洞察」は自己の感情状態や自己の感情表現力について知ることができる能力であり、「状況洞察」は変化する状況に対して適切に対処する能力とされる(内山ら, 2001)。このこと

からも、看護学生は自己の感情状態に対して十分に認識していないと思われる。看護職をはじめ対人援助に従事する職種の者が、心身の健康を保ちながら働き続けるためには、他者の気持ちに配慮しながら周りの状況を的確に判断しつつ、自己の感情状態にも留意する必要があるだろう。

「リーダーシップ」得点については、専攻別による有意差は認められなかったものの、看護学生の得点は文系学生、理系学生と比較して低い得点であった。日常生活スキル尺度(大学生版)を使用し調査した結果(長谷部ら, 2012)からも、看護学生はリーダーシップに関する項目の得点は低値であることが示されている。尺度は異なるが、看護学生の性格特性としてリーダーシップ能力の低さが確認された。したがって、学生自らが考え、他者に働きかけることによって、より良い方向へ周りの人を動かすことができるような能力を身につけさせる必要がある。例えば演習やグループワークのみならず、課外活動をはじめとした学生が積極的かつ主体的にリーダーシップを培えるようなリーダーシップの育成に関わる教育場面をつくりだす必要があると考えられる。

本研究で性差が認められたのは「対人コントロール」得点であり、女性よりも男性が高いという結果が得られた。「対人コントロール」は対人関係を良好に維持していくために必須の技量とされている(内山ら, 2001)。「対人コントロール」については、看護学生は理系学生よりも有意に得点が高かった。この結果は、男子看護学生の「対人コントロール」得点が非常に高いことが影響していると思われる。「対人コントロール」は他者の能力を見出し、それを適宜利用する力だとされ、他者を強制的ではなく自発的に動かす能力とされる(内山ら, 2001)。この能力は集団内でのリーダーシップを発揮するのに不可欠である。

岡村(2013)は情動知能理論を用いた中堅看護師の研修を実施し、研修前後でEQSを実施したところ、「自己対応」、「対人対応」、「状況対応」の領域全てにおいて得点が上昇し、人間関係や問題解決能力の向上、感情活用能力の向上をねらいとしたプログラムの有効性を報告してい

る。そのプログラムでは同じ立場にある仲間同士での取り組みにより、ピアサポートの効果が得られ、人材育成につながったことを述べている。例えば学生においては「対人コントロール」の能力に長けている男子看護学生の強みを生かす協同作業などが有用であると考えられる。他の学生にとって、身近に模範となるモデルが存在することで、良い刺激をうけることが可能となるため、メンバーシップの獲得やより良いリーダーシップのあり方を学生が自ら学ぶきっかけとなるのではないだろうか。教育場面において、内省や他者理解を通じて、学生が「状況対応」能力や感情活用能力を高めるよう関わっていく必要があると考えられる。

VI. 本研究の限界と今後の課題

井村ら(2012)によれば、患者を全人間的に捉える看護教育を受けている看護学生は対人対応領域において能力が高いと述べている。本研究で用いた看護学生のデータは1年次生と2年次生のものであり、発展的な看護教育は未履修の時期である。看護教育という影響要因を考慮し経年的変化や成長に着目した縦断的研究が必要であろう。また、今回の調査対象者の男子看護学生、女子理系学生のサンプル数が少ないため、今後は学生の対象者数を増やす必要がある。

文 献

Goleman, D. (1995) : Emotional intelligence, Bantam Books, New York. / 土谷京子 (1995) : EQこころの知能指数, 22-39, 講談社, 東京.

長谷部ゆかり, 田中祐子, 井上美代江, 他 (2012) : 看護学部学生における導入教育の評価 - A大学における調査結果の検討 -, 聖泉看護学研究, 1, 1-9.

橋本由里, 平井由佳 (2014) : 情動知能特性と心の健康の検討 - 専攻別による比較 -, 日本感情心理学会第22回年次学術大会予稿集, 42.

橋本由里, 宇津木成介 (2010) : 看護学生のEQS

得点の傾向, 日本心理学会第74回大会発表論文集, 956.

平井由佳, 橋本由里 (2013) : 看護学生の情動知能特性と心の健康との関連, 島根県立大学紀要, 8, 19-27.

井村香積, 小笠原知枝, 永山弘子, 他 (2012) : 看護師と患者関係に基づく看護師の目標達成行動に関連する情動知能 - 看護師と看護学生の比較 -, 三重看護学誌, 14 (1), 81-89.

小玉有子, 奈良知子, 戸来陸雄, 他 (2014) : 医療・福祉系学生の情動知能とスキルに関する研究 - 学生と看護師・介護士の情動スキルの比較 -, 弘前医療福祉大学紀要, 5 (1), 31-38.

岡村典子 (2013) : Emotional Intelligence 理論を活用した研修プログラムの検討 - 中堅看護師を対象にした試み -, The Kitakanto Medical Journal, 63 (3), 233-242.

Salovey, P. & Mayer, J.D. (1990) : Emotional intelligence, Imagination, Cognition, and Personality, 9, 185-211.

内山喜久雄, 島井哲志, 宇津木成介, 他 (2001) : EQSマニュアル, 実務教育出版, 東京.

宇津木成介 (2006) : ポジティブ心理学, 99-113, ナカニシヤ出版, 東京.

Emotional Intelligence in Nursing Students -A Comparative Study-

Yuri HASHIMOTO and Yuka HIRAI

Key Words and Phrases : Emotional Intelligence, EQS, Nursing student